論文審査の結果の要旨

氏名：酒　見　　薫

博士の専攻分野の名称：博士（国際関係）

論文題名：変貌する滞日フィリピン人社会
　　トランスナショナルコミュニティからメタ・コミュニティへ

審査委員：（主査）　教授　　渡　邊　武一郎

（副査）　教授　　小　川　直　人

（副査）　教授　　石　岡　丈　昇

本論文は滞日フィリピン人社会の構造について，文化人類学的の視点から顕らかにしようとする試みである。群馬県Ｘ市周辺に居住するフィリピン出身者を対象としたフィールドワークにより，カトリック教会とそこから派生するカリンデリアという場を中心に構築されるフィリピン人コミュニティの時間と空間，そしてそのコミュニティを構成する多様な人々を明らかにし，これまでのコミュニティ論で唱えられてきたトランスナショナルなコミュニティという概念を超えた新たなメタ・コミュニティという概念を提起するものである。

本論文の大まかな構成は，序論にて研究の背景，対象，目的，方法を述べた上で，第１章「グローバルな国際移民時代の到来」において，国際人口移動と国際移民の定義及びそれぞれの歴史的変遷について概観するとともに，ディアスポラ研究やグローバル移民等の近年の国際移民の動向について先行研究が纏めてられている。

続く第２章では，「アジアにおける国際移民の動向」について，世界の移民政策の変化のアジア移民の増大化の関係に触れながら，三つのアジア移民の傾向と種類について考察されている。

第３章では，視点を日本に移し，日本に入国する国際移民の歴史的推移と種類を列挙し，移民受け入れ国としての課題について提起されている。

第４章では，フィリピン人の国際人口移動を要覧しつつトランスナショナル化する在日フィリピン人の姿を描写している。

そして第５章では，「在日フィリピン人社会の移民研究とトランスナショナルを志向する人類学的研究」として，在日フィリピン人社会の先行研究を概括した上で，トランスナショナリズム概念の文化人類学的移民研究への展開について，幾つかの新しいフィリピン人移民の在り方とともに要説されている。

第６章「在日フィリピン人移民社会の人類学的研究－トランスナショナリズム的視点から」では，群馬県Ｘ市におけるフィールドワークをもとに，在日フィリピン人社会とそれを構成する個々人の生活実態が明らかにされている。

おわりに並びに結論では，第６章のフィールドワークデータをもとに滞日フィリピン人社会のトランスナショナル・コミュニティとしてあり方について考察が行われ，その理論的な分析の一助としてメタ・コミュニティという新たな概念が提案された。

以下，詳細に本論文の内容を振り返るとともに，その研究の意義及び当該研究分野への貢献について述べる。日本におけるフィリピン人社会を考察する前提として，筆者は第１章と第２章において，グローバルな国際人口移動とアジアにおける国際移民の歴史的変遷，動態的特徴を先行研究に当たるとともに，第３章，第４章，第５章ではフィリピンから日本への国際移民の歴史，移民送り出し側及び移民行け入れ側

の経済的・社会文化的背景を考察し，滞日フィリピン人社会を研究する学問的な意義を示している。また日本には様々な国からの移民が流入するなかで，フィリピン人移民を研究対象とする意義をその特徴を明確にすることで表明している。その特徴とは在日外国人の中でもフィリピン人は「永住者」資格での在住が多く，また現在も増加し続けている点である。すなわち在日フィリピン人の多くは「日本人の配偶者等」という資格により日本国内に居住しており，彼女たち（多くの場合）は日本人と結婚して日本人の家庭に入り，日本で暮らしており，その生活形態は日本の社会に組み込まれているのである。これは中国人が移住先でチャイナタウンを，韓国人・朝鮮人がコリアンタウンを作り一定地域に集中して居住する事で，移住先の国の文化・伝統，場合によっては思想までも受け入れないで生活しているのとは大きく異なるのである。フィリピン人移民は日本の家庭の一構成員であり，日本の一般家庭として大都市ではなく日本各地に地方都市に分散居住しているのである。これにより群馬県Ｘ市を本研究のフィールドワーク地として選択する事は，日本に居住するフィリピン人社会のマイクロコズムとして正当性を見出す事ができる。

そして，その群馬県Ｘ市におけるフィールドワークを扱った第６章では，主に日本人との結婚により日本に移民し，その後は定住者として日本に滞在する人々の生活実態について，カトリック教会とのその周辺での会合を対象に参与観察を実施し，コミュニティ内での人間関係を詳細に描いている。フィリピン人移民が世界各地の移民先でカトリック教会を中心としてネットワークを築きあげ，教会でのミサ等の終了後に教会周辺に即席の集会場を作り上げることは既に知られているが（マテオ　2003），本研究ではカトリック教会によるミサ等の様々な宗教的イベントの他に，教会近くで開催される「カリンデリア」と呼ばれる食事会こそが，滞日フィリピン人社会のコミュニティの存立を支える場である事が解き明かされている。

先に触れたように，ここで筆者が調査の対象とするのは先行研究で主に扱われたエンターテイナーと呼ばれる興行ビザで来日した人々でない点にも注目すべきである。筆者は，これまでの移民の労働の種類や在り方，更にはジェンダーとの関係性を中心とした研究から，移民たちが移住先で作り上げる社会と，その社会を構成する移民たちと母国に残された家族たちとの間で構築される社会を合わせた共同体こそが滞日フィリピン人コミュニティであることを詳らかにしている。この筆者の着眼は調査対象を「在日」フィリピン人社会ではなく「滞日」フィリピン人社会と表現していることからも明らかであり，筆者の洞察力の高さを証明していると言える。また，在日でなく滞日とした事により，コミュニティの構成員は日本国内の居住者のみならず母国フィリピンの居住者も含むことになり，従前の時間の経過とともに国境を越えて移動するトランスナショナルなコミュニティから，時間の経過に関係無く，国境を越え空間的に遠く離れた人間間での共時的に共有するコミュニティの在り方を示し，滞日フィリピン人社会のトランスナショナルなコミュニティから新たな形態のコミュニティへの進化を指摘した点はコミュニティ論研究に大きく貢献をしていると言える。

以上，本論文は国際人口移動及び国際移民の文化人類学的研究として，綿密なフィールドワークが実施され，フィールドワークデータの理論的分析において新しい概念が提起されるなど，当該研究分野に対する貢献は否めない。カリンデリアを仲介とするフィリピン人コミュニティは一方では物理的な場でありながら，他方ではインターネットにより母国フィリピンと，更には他の国々とも同時に繋がっており，時間と空間の束縛から解放されたコミュニティである。また，その時空間の超越の在り方は，ある一点から次の一点へと超越していくものに留まらず，この点において明確にトランスナショナルをも超越していると言えよう。従って，筆者の主張するように滞日フィリピン人コミュニティはトランスナショナル・コミュニティからメタ・コミュニティへと進化発展していると言えよう。

しかしながら，この新たに提起されたメタ・コミュニティという概念は，その分析課程及び分析方法が十分なものであるとは認めがたく，より緻密なデータ分析と理論構築が望まれる。この点においては，本研究の今後の発展を大いに期待する。

よって本論文は，博士（国際関係）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

令和６年２月 20 日